

# 認知症支援活動の地域連携における英プリマス大学の役割

The role of the University of Plymouth in regional cooperation for dementia support

中塚 富士雄 Fujio Nakatsuka

日経金融工学研究所  
デジタルハリウッド大学大学院 修士

日本は成年後見制度改革の多くを英国から取り入れてきた。現在、日本の学界やボランティア団体の指導者が注目しているのがDementia Action Alliance (略称；DAA、認知症活動連盟)である。本稿で取り上げるプリマスDAAは英国のなかでもトップクラスの成功例である。プリマス市は英国南西部の人口約26万人の中規模都市ではあるが、プリマスDAAには110団体が参加し日常的な活動や新しいサービス・技術の開発に大きな成果を上げている。医学部・看護学部を持つプリマス大学がプリマス市の支持のもとにDAAのまとめ役となって、参加団体それぞれの活動に深く関わっていることが、その大きな原動力となっている。

キーワード：認知症支援、地域連携、大学の役割、組織運営、サステナビリティ

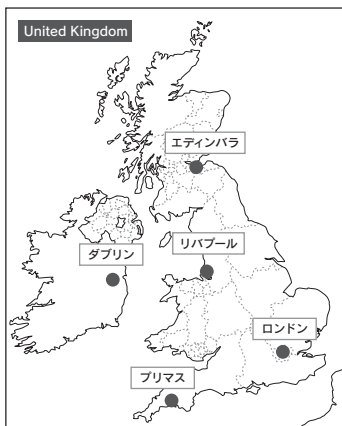
## 1. はじめに

筆者は今春、本大学大学院を卒業したデジタルコンテンツマネジメント修士であり、勤務先である日経金融工学研究所で高齢者支援サービスの開発を行っている。本レポートは認知症支援のための地域連携活動において大きな成果を上げているプリマスDAAの活動を主に組織運営上のポイントと、その結果としてのデジタルサービス・コンテンツの開発成果としてまとめたものである。

プリマス市訪問は2019年6月23日～7月3日のFintech研究のための英国滞在中の6月27、28日である。同行者の金子智紀氏(特定非営利活動法人 認知症フレンドシップクラブ本部、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科井庭崇研究室)は6月26日～29日までプリマス市に滞在した。

今回の調査訪問に先行して2019年4月22日～5月3日のFintech Weekのための訪英時に英アルツハイマー協会等からDAAに関する情報を収集した。この後、プリマス大学の認知症研究パートナーシップ・リードでありプリマスDAAの議長でもあるイアン・シェリフ教授と連絡を取り、プリマスDAAに関する基礎資料を入手した。5月18日に大阪市で開かれたシンポジウム(朝日新聞社、朝日新聞厚生文化事業団主催)に出席したイアン・シェリフ教授とプリマス市訪問時の調査のポイントなどの打合せを行い、訪問先との調整などを依頼した。

図1：プリマス市の位置



## 2. 認知症活動連盟の組織構造

### 2.1. 全国レベル

英国政府は2009年2月『認知症とともに良き生活(人生)を送る：認知症国家戦略』(Living well with dementia: A National Dementia Strategy)を発表し、翌2010年に全国組織として認知症活動連盟が設立された。

National members(全国メンバー)は、イングランド全域(より広域に活動する組織も含む)で一定の活動実績を持つ(あるいは目指す)団体である。慈善団体、公的機関、民間部門の合計で、2017年度の年次事業報告書によれば、参加団体(法人を含む)数は152である。各団体は全国連盟加入時に全国連盟のウェブサイトでアクションプランを公開する必要がある。また全国レベルでの四半期報告および四半期ミーティングに参加し、全国連盟への財政面、活動面での貢献を求められる。

参加団体の行動規範はDementia Statements(認知症宣言、2010年度制定、2017年度改定)であり、認知症の人がよりよい人生を送るための選択、介護者等による支援の提供、社会的な知見の共有等のベストプラクティスのポイントをまとめている。

### 2.2. 地域レベル

認知症活動連盟のLocal members(地域メンバー)は、イングランドの個別の地域で活動し、全国的な広がりを持たない組織である。DAAウェブサイトに行動計画を公開する必要がある。メンバーは、地域レベルでの四半期報告および四半期会議に参加し、DAA年次イベントに参加する。全国連盟の運営に対して自発的な財政的または現物での寄付をするよう求められる場合がある。

## 3. プリマス認知症活動連盟

### 3.1 組織概要

Plymouth Dementia Action Alliance(PDAA：プリマス認知症活動連盟)は2011年に、プリマスで設立された40団体の加盟でスタートしたが、現在では110団体が参加している。プリマス大学のイアン・シェリフ教授らがプリマス市、市議会に働きかけ、市からの全面的なバックアップのもとに創設された。連盟は2か月間一度、運営委員会を開き、各加盟団体の計画、進捗状況、新しい

取り組み、懸念される問題などを話し合う。運営委員会への参加は平均50団体前後である。

イアン・シェリフ教授らが起草したPDAA独自の行動憲章を持っており、各参加団体は、この憲章に照らして自主的に活動を行っている。目標を自ら設定してDAAウェブサイトに行動計画と進捗状況を掲示する点は、他のLocal DAAも同様だが、プリマスは運営委員会での議論が非常に活発であり、多くの参加団体が進捗状況をきちんと更新している。イアン・シェリフ教授が日常的に参加団体の現場を訪問し、現場の状況や声を踏まえたアドバイスを行い、また大学の研究者とのネットワークに結びつけていることが、活動の質を高める要因となっている。

2016年に英国アルツハイマー協会から年間表彰を受けるなど、関係方面から高い評価を得ており、国際的にも注目されている。海外からの訪問者も多く、調整には市のPDAA専任職員が当たっている。こうした対外的な評価の高さも参加団体の意識向上に役立っているといえる。

### 3.2 産学医連携と大学の役割

プリマス大学は学生数2万人、職員数3000人の総合大学で医学・看護学、生命科学、経営、芸術など多様な学部構成を誇る。プリマス市の人口が約26万人であり、その存在感は大きい。同市はメイフラワー号出発の港であり、またスペインまでフェリーで7時間という歴史都市、リゾートとしての性格を強めており、最近の人口増も老後移住者が一因となっている。このため認知症支援をはじめとする介護政策においても経済合理性やアウトカムの評価、サステナビリティへの要請が強まっている。

イアン・シェリフ教授は地方公共団体の介護・福祉における実務経験があり経営学修士であるが、所属は医学部（歯学も含む）である。このため現場で吸い上げた問題や要望を的確に理解し学内の研究者や組織に提案をすることが容易な立場になっている。次章では、プリマスDAAの最新の取り組みを紹介する。

## 4. デジタルプロダクト、メディア開発の動向

### 4.1. ACEmobile

ACEmobileは認知症スクリーニング検査に役立つiPad用アプリである。プリマス大学のクレイグ・ニューマン博士とユニバーシティホスピタルズプリマスNHSトラストのルパート・ノド博士によって開発された。2018年のHSJ Award（英国最大の医療研究・開発イベント）で1500件の同種のアプリケーションのなかから、技術による効率改善の観点で最優秀賞を受賞した。

写真1：ACEmobile



Addenbrooke's Cognitive Examination III (ACE III) として知られる一般的な認知症スクリーニング評価のプロセス全体を通して医師と看護師をサポートする。注意と記憶処理を含む認知ドメインをテストする19の動作群で構成される。オンスクリーン指導など、臨床チームのより多くのメンバーが自信を持ってスクリーニングを実施できるようにすることを目的とし、エラー率を減らすためにヒューマンファクターテストを使用して開発された。

臨床医によって設計されたこのアプリは、安全で匿名化されたデータも収集し、チームが認知症の理解とそれを早期に検出できるようにしている。現在1,200の臨床サイトが登録されており、臨床医と臨床チームは無料でアクセスできる。

認知症クリニックでのACEベースの評価の信頼性、正確性、効率性をサポートする無料の手段を臨床医に提供するとともに、将来の認知症の評価を改善するための研究データを生成する。

### 4.2. Radio Me

興奮状態の軽減や服薬などの生活習慣の改善にラジオを利用した音声プログラムAI（人工知能）。デジタル放送のラジオプログラムを、スムーズにリスナー個別のリマインダー、情報、音楽受信に切り替えることができる。バイオプレスレットから生体反応を検知しスイッチの起点とする。現在の認知症患者は1920年代生まれの世代が中心であり、ラジオに対する親近感が非常に強いことから、この手法が採用された。

写真2：Memory Café 'moments' 2階展示コーナー



プリマス大学でBrain Computer Music Interfaceのプロジェクトの一部として実施された研究に加えて、人工知能、感情に影響を与える音楽、認知症に関する国家政策の形成における大学の関与に関する研究に基づいたプロジェクト。BBCのデボン放送局なども協力をしている。

2019年5月The Engineering and Physical Sciences Research Council (EPSRC：エンジニアリング・自然科学評議会、国家レベルの産学官研究費拠出・配分機関)から270万ポンド（約3.5億円）の資金提供を受け、多数の大学・研究機関が参加する50か月間に及ぶ実証実験を開始した。

Radio Meの具体的な機能は次の通りである。

ラジオのスイッチを入れると、通常のローカルステーションの放送番組をキャッチする。その後、内蔵された電子スケジュール帳によって指示された時点、あるいは曲の開始時に、DJのような声が本物のDJを無効にし、リスナーに飲み物を飲んだり、薬を飲んだり、メモリーカフェなどに出席することを思い出させる。

またバイオプレスレットの測定値によってリスナーが動揺していることを検出する場合、AIはスケジュールされた曲の選択を無効にし、

ユーザーの個人ライブラリから興奮状態を緩和する曲を選択し、ユーザーが動揺していないことをRadio Meが検出するまで、落ち着ける素材を再生し続ける。

### 4.3. Memory Café 'moments'

2010年に認知症ケアに携わる2人の看護師が立ち上げたケアサービス組織が基盤となり2015年以降に数多くの地域内での議論を経て発展したプロジェクト。1対1、あるいは少人数による質の高いケアの提供をアドミラルナース（認知症専門看護師）が付き添って実施する。市内の中心商業地区のビル内にあり、1階はカフェ、中2階は興奮状態になった場合などに休息をとる休憩所、2階はプリマスDAAの関連団体等が開発した認知症関連の支援グッズやサービス、アプリケーションの展示、歯科医による口腔ケアの相談室、会議室が配置されている。

写真3：Memory Café 'moments' 1階 カフェ



カフェの設計で最も工夫されているのが「視覚と会話による記憶の回復」である。1階カフェは認知症発症者の年代に応じて、青春期等の思い出を想起させるようなポスターやグッズが展示されている。好みのエリアに座れば同年代の記憶を共有できる人同士の会話が自然に始まる。また2階の会議室では、同様に、同年代の少人数グループによるビデオ鑑賞会が開かれる。上映されるのは1950年代のプリマス市のビデオ映像など、昔の記憶に関するものであり、参加者は、鑑賞後に思い出を語りあう。

写真4：Memory Café 2階 世代別ビデオ鑑賞会



カフェ内、ビデオ鑑賞会等の際の個々人の様子はカフェを運営するアドミラルナースが記録し所見をまとめ、今後の個々人への対処やプリマス大学看護学部との連携によるケア研究等に活かす。

写真5：Memory Café 'moments' 入口



### 5. 終わりに

日本における認知症対策は、発症者を取り巻く社会の側からの目線で取り組まれてきたと思われる。すなわち「周りに迷惑をかけない」ことを重視して、特別養護老人ホームなど、ハコものの整備が進められてきた。その結果として、財政や介護資源配分のミスマッチを生じ、公的施設は順番待ち、民間施設は入居費用が高く廃業が多発している。社会保障費の効率化、在宅介護の活用は緊急かつ必須の課題となっているが、在宅介護を支える様々なサービスの開発は、公的機関に知見はなく、地域連携も医療機関中心の域を出ず、もっぱら個々の医療機関や民間の創意工夫に委ねられていると言っても過言ではなだらう。この点において地方の大学が医・経連携を進化させるプリマス・モデルは、学ぶべきことが多いと思われる。

今後も本学関連のイベント等においてプリマスDAAの取り組みを紹介していきたいと考えている。末筆ながら、今回の訪問でカメラマンを引き受けてくれた金子智紀氏に感謝の意を表する。